

【第8問】

英国から来日して8年目のX男（身長185cm、体重85kg）は、深夜に帰宅途中の路上で、酩酊して暴れるA女とそれをなだめていたB男（身長165cm、体重60kg）とがもみ合ううちにAが倉庫の鉄製のシャッターにぶつかって大きな音を立てコンクリート面に尻もちをついたのを目撃し、同時にAから「ヘルプミー、ヘルプミー」と叫ぶ声を聞いた。Xは、BがAに暴行を加えているものと誤解し、AとBの間に割って入り、次いで、攻撃をやめるよという意味で両手を差し出しながら、Bの方へ近づいた。これを見たBが防御のため両こぶしを胸の前あたりにあげたので、XはBがボクシングのファイティングポーズのような姿勢をとって自分に殴りかかってくるものと誤信した。Xは自己及びA女の身体を防衛しようと考え、とっさにBの顔面に向けて空手技である回し蹴りを繰り出し、右足をBの右顔面付近に命中させたところ、Bは路上に転倒し頭蓋骨骨折等の傷害を負った。数日後、Bは同傷害による脳硬膜外出血及び脳挫傷により死亡した。

なお、Xは来日1年目から空手を習っており、剛柔流空手3段の腕前を有していた。また、Bには武道の経験等はなく、本件発生前に飲酒をしていた。

Xの罪責を論ぜよ。

参考判例：最高裁昭和62年3月26日第一小法廷決定